

センブリ（リンドウ科）

学名： *Swertia japonica* (Schults) Makino



2016.9.28 小城市天山

千回振り出しても（煎じても）まだ苦いことからこの名前があります。確かに花も葉も茎もかむと強烈な苦味があります。従って「良薬は口に苦し」とはこのセンブリのことを言っているのかもわかりません。佐賀県内では主に北部山地の日の当たる湿り気のある崩壊地や草原で見ることができますが、薬用にと人が採取するため最近ではめっきり少なくなりました。草丈が10~20cmと低いので9~10月の花の時期でないとなかなか気付きません。開花期には付近に口ゼット状の幼苗を見ることが出来ますがこれは翌年開花するものです（2年生植物）。

以前、薬用としての需要が高まったため栽培試験を行ったことがありますが、播種してもなかなか発芽しません。やれ発芽には特殊な土壌菌が必要だの、やれ特別な環境でなければということいろいろと試行錯誤しましたが、結局成功しませんでした。今では長野県の園芸連が栽培に成功しています。採取した種子を1月中に播種することで発芽率が良くなるということです。

薬用には開花期の全草を乾燥し粉末として耳かき一杯位を食欲不振や消化不良の時にそのまま服用します。これは中枢神経が苦味を感知して胃液の分泌を高めるためで、センブリの生薬名「当薬」はその苦味から「当（まさ）に薬なり」から由来しています。また最近では毛根を刺激して発毛を促進する効果が認められ、この含水アルコール抽出物がトウガラシと共に各種の発毛剤に配合されています。

佐賀県内にはセンブリによく似た同属のムラサキセンブリとイヌセンブリが自生しています。ムラサキセンブリは草丈が高くその名の通り花が濃紫色で、天山では9月から10月にかけてセンブリと共に見ることができます。一方、イヌセンブリはセンブリよりもやや大型で水辺に多いことから区別がつかます。いずれも苦味が弱いことから薬用としての価値はほとんど無いようです。

（野中源一郎）